



栗本 齊

「90年代J・P・O・Pの基本」が
この100枚でわかる！

聴こうよ、 90年代J-POP!

その奇跡のような時代の
楽曲群を凝縮した、

J-POP入門書

縦横無尽の
ジャンルから厳選した
アルバム100枚を
精緻にレビュー!!

「90年代J-POPの基本」がこの100枚でわかる!

栗本 齊

星海社

273



バブル崩壊、トレンディドラマ、Jリーグ、阪神・淡路大震災、地下鉄サリン事件、Windows 95、ルーズソックス、消費税5%、失楽園、長野オリンピック、iモード、2000年問題。ざっとランダムに挙げてみたが、これらはすべて90年代に起こった出来事や象徴するキーワードだ。そして、このような世相の背景でBGMとして聞こえていた90年代J-POPの中から、よりすぐりのアルバム100枚をレビューしたのが本書である。「90年代J-POP」と一括りにしてみたのはいいのだが、では何が「90年代J-POP」なのか、すぐにイメージが湧くだろうか。これがなかなか一筋縄ではいかない。よく言われるのが、小室哲哉とビーイングというヒットメーカーの存在だろう。the globe、安室奈美恵、華原朋美といったTKサウンドと、ZARD、B'z、WANDS、T-BOLANなどのビーイング・サウンドは、ヒット曲、ヒット作の大きな割合を占めていることは確かだ。しかし、その一方で、サザンオールスターズ、松任谷由実、小田和正、中島みゆき、長渕剛、

CHAGE&ASKAとつった70年代から活動しているベテランたちも続々とミリオン・ヒットを生み出した時代でもある。

当然のごとく、新しいアーティストもミリオン級のヒットメーカーとして多数登場してゐる。Mr.Children、スプッツ、GLAYとつったいわゆるロック・バンドから、DREAMS COME TRUE、シャ乱Q、MY LITTLE LOVERのようなポップ系アーティストまで、バラエティに富んだ個性派たちが続々とミリオン・ヒットを生み出したのも90年代の特徴だ。彼らをジャンルで整理するにはあまりにも多様過ぎて困難であり、音楽的な傾向が画一化されていないのも90年代の不思議で面白い一面ではないだろうか。

そして、それまではアンダーグラウンドだったジャンルまで日の目を見ることになったのも、90年代の大きな特徴であると言える。ピチカート・ファイヴやオリジナル・ラヴなどの渋谷系や、MISIAやSUGAR SOULといったR&Bディーヴァたち。そこから宇多田ヒカルというマンモス・アーティストが登場し、90年代を締めくくる存在となったのはご存じの通りだ。また、ヒップホップやテクノのようなマニアックだったクラブ・ミュージックが一般化し、ハードコアやメロコアといったパンク勢からもスターが登場。英語詞で歌うHi-STANDARDまでもがミリオン・ヒットを記録する時代だったのだ。

本書では、こういった90年代音楽シーンの傾向を、100枚のアルバム・レビューによって浮かび上がらせようと試みた。ここで課したルールは、90年代の10年間を年ごとに分け、1年につき10枚のアルバムを抽出するということ。年間チャートの上位ということではなく、その年を代表すると思われる作品を独断で選んだ。また、1アーティストにつき、1作品に限定し、単にそのアーティストにとって一番売れた作品ということではなく、代表作と思えるものや、90年代の音楽シーンにおいて大きな影響を与え、時代を象徴すると言えりようなアルバムのセレクションを意識した。

そして、レビュー本文に関しては、そのアーティストの魅力や個性がどのようなものかをなるべく客観的に捉えるようにし、個人的な主観は控えめにしたつもりだ。趣味嗜好を反映すると平等ではなくなってしまうためである。よって、本書においてはあくまでも俯瞰する視点を保つことを重視し、すべての作品には優劣を付けず、並列で評価するように心がけた。

ここで90年代のJ・POPを総括しようと思ったのには理由がある。それは、昨今90年代リバイバルが急速に進んでいるからだ。ここ10年くらいはシティポップを筆頭に80年代を振り返ることが多かったのだが、最近は音楽のみならずカルチャー全般において「90年

代」というキーワードをよく聞くようになった。以前より90年代の音楽シーンがどういうものだったのかを、自分なりに言語化しておきたいと感じていたこともあり、機が熟したと言ってもいいだろう。また、70年代後半から80年代に関しては、前作の『シテイポップの基本』がこの100枚でわかる!』（2022年／星海社新書）で、シテイポップという切り口ではある程度まとめることができたが、90年代に関してはまだまだ言葉足らずだと感じていたこともあって、本書の企画につながった。

さらに言えば、その時代をまとめた書籍がこれまでにあまりなかったことも大きい。ディスクガイド本というと、90年代のJ-POPに関する書籍はすでに2冊出版されている。『THE GROOVY 90'S—90年代日本のロック／ポップ名盤ガイド』（2010年／ミュージック・マガジン）と『90年代ディスクガイド——邦楽編』（2021年／Pヴァイン）である（なお、前者には筆者も寄稿している）。いずれも丁寧に編集された素晴らしいディスクガイドではあるのだが、それぞれが「ミュージック・マガジン」と「ele-king」という雑誌の編集部が編んだ別冊的な書籍であり、それらの色が濃厚な内容だった。また、90年代ではなく平成という切り口だと、柴那典しばとものりさんの『平成のヒット曲』（2021年／新潮新書）という良書はあるが、こちらはあくまでもヒット曲に特化しており、アルバム単位ではなかった。

これらの先達を参考にしながらも、90年代を100枚のアルバムでコンパクトにまとめてみた。ディスクガイドという体裁なので、どこから読んでいただいてもかまわないが、一冊通して読むと90年代の日本の音楽シーンの流れがわかるように意識した。もちろん、この100枚ですべてが収まらないことは重々承知ではあるが、あくまでも“基本”というところをご理解の上で、90年代J-POPの果てしない大海原への旅にお付き合いいただければと願っている。

はじめに 3

1990

サザンオールスターズ Southern All Stars 18

BUCK-TICK 悪の華 20

FLYING KIDS 続いてゆくのかな 22

LINDBERG LINDBERG III 24

東京スカパラダイスオーケストラ スカバラ登場 26

BEGIN 音楽旅団 28

たま さんだる 30

KAN 野球選手が夢だった。 32

JITTERIN' JINN バンチアウト 34

岡村靖幸 家庭教師 36

1991

山下達郎 ARTISAN 40

ビブラストーン ENTROPY PRODUCTIONS 42

フリッパーズ・ギター DOCTOR HEAD'S WORLD TOWER
-ヘッド博士の世界塔- 44

ORIGINAL LOVE LOVE! LOVE! & LOVE! 46

HIS 日本人 48

小泉今日子 afropia 50

槇原敬之 君は誰と幸せなあくびをしますか。 52

CHAGE&ASKA TREE 54

B'Z IN THE LIFE 56

長渕剛 JAPAN 58

1992

THE BLANKEY JET CITY BANG! 62

小田和正 sometime somewhere 64

SING LIKE TALKING Humanity 66

L⇔R Lefty in the Right 68

米米CLUB Octave 70

X JAPAN ART OF LIFE 72

中島みゆき EAST ASIA 74

竹内まりや Quiet Life 76

DREAMS COME TRUE The Swinging Star 78

森高千里 ベーザンランド 80

1993

氷室京介 Memories Of Blue 92

橘いずみ どんなに打ちのめされても 94

WANDS 時の扉 96

PIZZICATO FIVE BOSSA NOVA 2001 98

ZARD 揺れる想い 100

玉置浩二 カリント工場の煙突の上に 102

小沢健二 犬は吠えるがキャラバンは進む 104

福山雅治 Calling 106

松任谷由実 U-miz 108

広瀬香美 SUCCESS STORY 110

1994

trf WORLD GROOVE 114

藤井フミヤ エンジェル 116

CARNATION EDO RIVER 118

- Mr.Children Atomic Heart 120
- テイ・トウワ Future Listening! 122
- LUNA SEA MOTHER 124
- シャ乱Q 劣等感 126
- 大黒摩季 永遠の夢に向かって 128
- THE BOOM 極東サンバ 130
- JUDY AND MARY ORANGE SUNSHINE 132

1995

- 斉藤和義 WONDERFUL FISH 136
- LOVE TAMBOURINES ALIVE 138
- 奥田民生 29 140
- スチャダラパー 5th WHEEL 2 the COACH 142
- SMAP SMAP 007 ~Gold Singer 144
- 小島麻由美 セシルのブルース 146
- スピッツ ハチミツ 148
- 古内東子 Strength 150
- MY LITTLE LOVER evergreen 152
- キングギドラ 空からの力 154

1996

ウルフルズ バンザイ 158

フィッシュマンズ 空中キャンプ 160

GLAY BEAT out! 162

サニーデイ・サービス 東京 164

thee michelle gun elephant cult grass stars 166

globe globe 168

安室奈美恵 SWEET 19 BLUES 170

エレファントカシマシ ココロに花を 172

UA 11 174

久保田利伸 LA・LA・LA LOVE THANG 176

Column**2** ヒット・プロデューサーたち 178

1997

THE YELLOW MONKEY SICKS 188

電気グルーヴ A(エース) 190

Bonnie Pink Heaven's Kitchen 192

山崎まさよし HOME 194

SPEED Starting Over 196

川本真琴 川本真琴 198

今井美樹 PRIDE 200

KinKi Kids A album 202

スガシカオ Clover 204

Chara Junior Sweet 206

1998

Buffalo Daughter New Rock 210

PUFFY JET CD 212

SUPERCAR スリーアウトチェンジ 214

Every Little Thing Time to Destination 216

Cocco クムイウタ 218

MISIA Mother Father Brother Sister 220

モーニング娘。 ファーストタイム 222

ゆず ゆず一家 224

the brilliant green the brilliant green 226

hide Ja,Zoo 228

1999

浜崎あゆみ A Song for xx 232

椎名林檎 無罪モラトリアム 234

Sugar Soul on 236

宇多田ヒカル First Love 238

くるり さよならストレンジャー 240

Hi-STANDARD MAKING THE ROAD 242

L'Arc~en~Ciel ray 244

RHYMESTER リスペクト 246

Dragon Ash Viva La Revolution 248

clammbon JP 250

Column **3** オルタナティヴとフェス黎明期 252

おわりに 262

〈レビューページの見方〉

レーベル

初出のレーベル名を記載しています。

発売年・月・日

オリジナル盤の発売年月日を記載しています。

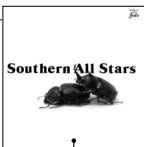
アーティスト名

アルバム名

サザンオールスターズ

Southern All Stars

- 01. フリフリ 55
- 02. 夢を喰った男にゴッホ
- 03. 青春の夢
- 04. 忘れられた Big Wave
- 05. YOU
- 06. ナカオカズ恋歌
- 07. CRY (涙の嵐) (アルバム未収録)
- 08. 恋風
- 09. MARCO
- 10. 夢を喰った男にゴッホ
- 11. 夢を喰った男にゴッホ
- 12. GO-GO!!
- 13. 遠くへ (オリジナル盤には収録されていない)



活動休止から3年の沈黙を破り発表した
メンバーバンドのごった煮感満載の大作

混

純としたなんでもありの90年代、サザンオールスターズほどの華開けにふさわしく、象徴的なバンドはいないのではないだろうか。今さら言うまでもなく、彼らは日本のロック史上、最高のロックンロール・バンドだ。1997年8月にデビューしてから40

年以上にわたって第一線であり続け、何度もビッグを運ぶ彼らだが、本当にメンバーバンドになったのは90年代に入ったこの作中からという印象が強い。サザンは1990年から4年組の大作アルバム「MAMA KIRA」でメンバーをリセットしたんだけ、メンバーはそれぞれソロ活動に励むことになる。そして3年の沈黙の後、1998年にシングル「みんなのうた」で復活。翌1999年の初のチャート上位楽曲「まよなへいビリー」などいくつかのシングルヒットで勢いを付け、満を持して発売したのが、この5年ぶり9作目となった本作である。夏からオール・スタイルの「フリフリ55」で勢

いよく始まるのはわかるが、フワフワを取り入れた2曲目の「夢は花のように」(02)では全編スペイン語で歌い、続く「一番の恋」ですべて英語でアル・イス・ロクを披露するなど、あまりにも支離滅裂な展開に面する。このごった煮感も本作の大きな特徴で、山手部の影響を受けたという桑田佳祐のひとりアカペラ「忘れられたBig Wave」(洋楽音源に乗せて原由子が歌う「ナカオカズ恋歌」大団にビッグバンド・ジャズのアレンジを起用した「MARCO」など、収録曲の幅は広い。そもそもこのミクスチャーこそが彼らの魅力だったので、当然と言えば当然だが、それがそれよりも情報量ともいえる内容は音楽アルバム期にふさわしい。

ただ、それでもバンドの一体感がとれていないのは思ふ。桑田佳祐、大森隆志、原由子、関口和之、松田弘、野沢秀行という6人のメンバーそれぞれが成長したのかもしれないが、キーボード、シンセサイザー、

90's J-Pop: 001

収録曲

オリジナル盤の収録曲を記載しています。

ジャケット

一部の例外を除き、オリジナル盤のジャケットを記載しています。

サブスクリプション
サービス
(定額配信)
で楽しめる!

レビューを
読んだその場で
聴ける!

本書掲載 アルバム プレイリスト

Spotify



Amazon Music



Apple Music



*各アルバムの本書掲載情報とプレイリスト配信各サービスの掲載情報に差異がある場合がある旨、ご了承願います。

*本書に掲載しているものの、プレイリスト配信各サービスにて配信されていないアルバム、楽曲がある旨、ご了承願います。

*プレイリスト配信各サービスの事由による配信終了につきましては弊社対応外となります。

サザンオールスターズ

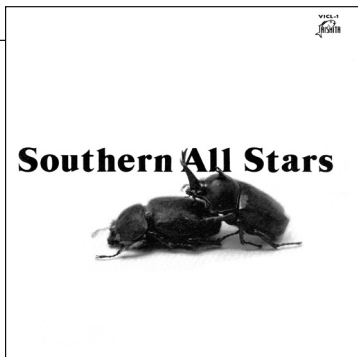
サザンオールスターズ

Southern All Stars

1990年1月13日発売

タイシタレーベルミュージック

01. フリフリ '65
02. 愛は花のように (Olé)
03. 悪魔の恋
04. 忘れられた Big Wave
05. YOU
06. ナチカサヌ恋歌
07. OH, GIRL (悲しい胸のスクリーン)
08. 女神達への情歌 (報道されないY型の彼方へ)
09. 政治家
10. MARIKO
11. さよならベイビー
12. GORILLA
13. 逢いたくなくなった時に君はここにいない



活動休止から3年の沈黙を破り発表した
モンスターバンドのごった煮感満載の大作

混

沌としたなんでもありの90年代。サザンオールスターズほどその幕開けにふさわしく、象徴的なバンドはいないのではないだろうか。今さら言うまでもなく、彼らは日本のロック史上、最高のロックンロール・バンドだ。1978年にデビューしてから40年以上にわたって第一線であり続け、何度もピークを迎える彼らだが、本当にモンスターバンドになったのは90年代に入ったこの作品からという印象が強い。

サザンは1985年に2枚組の大作アルバム『KAMA KURA』をリリース後いったん休止。メンバーはそれぞれソロ活動に励むことになる。そして3年の沈黙の後、1988年にシングル「みんなのうた」で復活。翌1989年の初のチャート首位獲得曲「さよならベイビー」などいくつかのシングルヒットで勢いを付け、満を持して発表したのが、この5年ぶり9作目となった本作である。

冒頭からオールド・スタイルの「フリフリ'65」で勢

いよく始まるのはわかるが、フラメンコを取り入れた2曲目の「愛は花のように (One)」では全編スペイン語で歌い、続く「悪魔の恋」ではすべて英語詞でブルース・ロックを披露するなど、あまりにも支離滅裂な展開に面食らう。このごった煮感には本作の大きな特徴で、山下達郎の影響を受けたという桑田佳祐のひとりアカペラ「忘れられたBig Wave」、沖縄音階に乗せて原由子が歌う「ナチカサ又恋歌」、大胆にビッグバンド・ジャズのアレンジを起用した「MARKO」など、収録曲の振り幅は広い。そもそもこのミクスチャーこそが彼らの魅力だったので、当然と言えば当然なのだが、それにしても情報過多ともいえる内容は音楽バブル期にふさわしい。

ただ、それでもバンドの一体感がぶれていないのは見事だ。桑田佳祐、大森隆志、原由子、関口和之、松田弘、野沢秀行という6人のメンバーそれぞれが成長したのかもしれないが、キーボード、シンセサイザー、

シーケンサーなどを操る6人が準メンバーとして参加している影響もあるだろう。とりわけ、桑田佳祐のソロ作で重要な役目を果たした小林武史が加わったことは、バンドとしても大きな転機といえる。実際、その後の映画のサウンドトラック『稲村ジェーン』（1990年）とヒット曲「涙のキッス」を収めた『世に万葉の花が咲くなり』（1992年）では、共同プロデューサーにクレジットされている。

それにしても、これほどまでにバラエティに富んだアルバムにもかかわらず、軽快なミディアム・ナンバー「YOU」や切ないバラード「逢いたくなった時に君はここにいない」といったキラークューンがしっかりと盛り込まれているのはさすが。しかもこれらはシングル・カットされておらず、これもまた自信の表れと言っていいだろう。バンド名をアルバム・タイトルに冠したのも納得の、サザンの代表作である。

フリッパーズ・ギター

フリッパーズ・ギター

DOCTOR HEAD'S WORLD TOWER -ヘッド博士の世界塔-

1991年7月10日発売
POLYSTAR

01. Dolphin Song
02. Groove Tube
03. Aquamarine
04. Going Zero
05. (Spend Bubble Hour in Your) Sleep Machine
06. Winnie-the-Pooh Mugcup Collection
07. The Quizmaster
08. Blue Shinin' Quick Star
09. The World Tower



本作のサウンドには膨大なサンプリングが施され、
彼らの出自であるバンド・サウンドを惜しげもなく捨て去った

90年代の大きなムーブメント“渋谷系”。タワーレコードやH M Vといった外資系CDショップ、特に渋谷エリアで偏って売れているアーティストの総称だったが、フリッパーズ・ギターはその発端といえるだろう。“渋谷系”という呼び名はアーティストサイドから見るとあまり歓迎されないネーミングのようだったが、リスナーにとっては大衆的な音楽とは少し角度の違う尖がったポップスを聴いているというステータスでもあった。彼らのフォロワーたちは、セントジエームスのボーダーシャツとベレー帽を身に着けたおしゃれな若者たちを中心に、音楽もまたファッショナブルなものだった。

フリッパーズ・ギターは、小山田圭吾と小沢健二が在籍したことで知られるバンドだ。1989年に全編英語詞のファースト・アルバム『Three cheers for our side』海へ行くつもりじゃなかった』でメジャー・デビューした際は5人組だったが、直後に3人が脱退。

小山田圭吾と小沢健二のデュオとなり、日本語で歌ったセカンド・アルバム『CAMERA TALK』を1990年にリリースした。ここまではいわゆるネオアコといわれる80年代のUK発ギタールポップに影響を受けたサウンドだったが、3作目となった本作では大きく舵を切り、90年代の同時代のUKサウンド、いわゆるクラブ・ミュージックとバンド・アンサンブルが融合したUKロックへのシンパシーが大いに表現されていた。

それにしても本作はとにかくクールながらも壮絶な作品である。というのも、サウンドには膨大なサンプリングが施され、もはや彼らの出自であるバンド・サウンドを惜しげもなく捨てているからだ。冒頭の「DO LPHIN SONG」からビーチ・ボーイズとバッファロー・スプリングフィールドが大胆に引用され、往年のポップ・ミュージックの再構築に挑んでいる。オールディーズ、ソフトロック、ソウル、ファンク、ジャズ、サントラといった有名無名問わず使えるものは使うと

いうくらいにスタンスで、ありとあらゆる音楽が容赦なくズタズタに切り刻まれ、彼らがクリエイトする音楽の素材になっている。さらに、過去の音源だけでなく、プライマル・スクリームやマイ・ブラッディ・ヴァレンタインといった同時代の最新の音楽までもフィチャーすることで単なるレトロ志向ではないサウンドに仕上がっているのだ。しかし、アレンジ面での大胆さと引き換えに、あくまでもメロディはポップであることにこだわり、しかもダンサブルにまとめているところに、彼らの強いアイデンティティを感じさせてくれる。

ただ、ここまでやり切ったことはグループが終焉に向かった理由でもある。本作リリースの数か月後にはあっけなく解散。およそ2年後に小沢健二はソロ活動を開始し、少し遅れて小山田圭吾はCorneliusと名乗って再デビュー。新たな伝説を作り始めるのである。

THE BLANKEY JET CITY

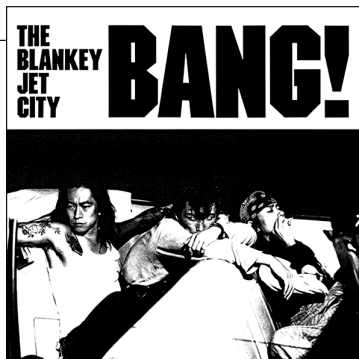
ブランキー・ジェット・シティ

BANG!

1992年1月22日発売

Nonfixx

01. RAIN DOG
02. 冬のセーター
03. SOON CRAZY
04. ヘッドライトのわくのとれかたが
いかしてる車
05. 絶望という名の地下鉄
06. とけちまいたいのさ
07. ★★★★★★
08. クリスマスと黒いブーツ
09. BANG!
10. ディズニーランドへ
11. 二人の旅
12. 小麦色の斜面



ヒリヒリするような衝動性を音に置き換えたかのような
アンサンブルが主体の、通算2作目のアルバム

1 989年から放送が始まり、バンド・ブームを牽引したオーディション番組『三宅裕司のいかすバンド天国』は、番組が終了する1990年末の間際には早くも視聴率が急落。「ブームは終わった」なんてこともまことしやかに噂され、出演者にもそれほど注目が集まらなくなってしまった。しかし、それでも実力あるバンドが続々と輩出されており、一歩抜きん出ていたのがTHE BLANKEY JET CITYだ。審査員から圧倒的な評価を受け、早々にメジャー・レーベルと契約。デビュー前には個性的なルックスを生かして、パリコレのモデルに起用されるほどだった。1991年にはアルバム『Red Guitar And The Truth』でデビューを飾るが、プロデューサーと意見が合わず納得いかない作品だったという。心機一転、土屋昌巳がプロデューサーを手掛けてレコーディングに臨んだのが、2作目となる本作である。

THE BLANKEY JET CITYは、ヴォーカル&ギター

の浅井健一、ベースの照井利幸、ドラムスの中村達也というロック・バンドとしては最もシンプルなスリーピース・バンドだ。音楽的にも、この編成を生かしたガレージ・ロック的なサウンドではあるが、これが一筋縄ではないかない。ヒリヒリするような衝動性を音に置き換えたかのようなアンサンブルが主体で、決して性急なパンク的な表現になるのではなく、しっかりと計算されたアレンジが施されている。アマチュア時代のレパトリーを中心に収めたという本作も、ヘヴィなオルタナティブ・ロックから、ネオ・ロカビリー風のハードなロックンロールまで変化に富んでいる。何よりも、浅井健一のヴォーカルが個性的で、アップ・テンポからミディアムまでゆるぎない表現力を見せてくれるのである。

音楽性のユニークさはもちろんだが、彼らの歌詞の世界観に魅了されたファンも多いことだろう。殺伐とした状況下で「おばあさんが編んでくれたセーターを

着なくちゃ」と歌う「冬のセーター」、テネシー・ウィリアムズの戯曲『欲望という名の電車』からタイトルのヒントを得た「絶望という名の地下鉄」、過激な表現だったためにタイトルが差し替えられた「★★★★★」「★★★★★」、ノイローゼになった友人のことを歌った「ディズニールランドへ」といずれもどこかゾツとするような世界を描いており、架空の映画の中の出来事のように現実から浮遊している感覚が独特だ。その究極が夢と現実が交差するラスト・ナンバーの「小麦色の斜面」だろう。そしてこういった浅井健一の独自の美学に基づいた詞世界を、バンドが見事に音楽表現に落とし込んで昇華しているのだ。

ワン・アンド・オンリーのポジションを守り続けた彼らは、2000年に突如解散。90年代の浮かれた時代に対するカウンターとして、独自のロックを奏でながら疾走し、21世紀の到来とともに燃え尽きたのである。

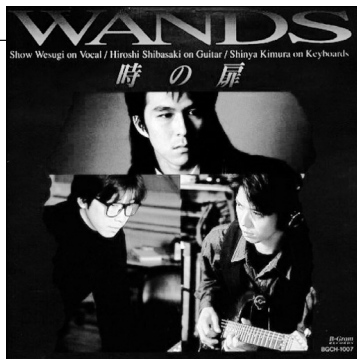
WANDS

ワズ

時の扉

1993年4月17日発売
TM FACTORY

01. 時の扉
02. このまま君だけを奪い去りたい
03. 星のない空の下で
04. もっと強く抱きしめたなら
05. ガラスの心で
06. そのままの君へと…
07. 孤独へのTARGET
08. Mr. JAIL
09. Keep My Rock'n Road
10. 世界中の誰よりきっと ~Album Version~



WANDSは90年代を席卷したヒット工房
“ビーイング”の最前線に立ち続けていた

90年代のJ・POPシーンを大雑把に表現するならば、“TKサウンドとビーイングの時代”である。大衆的なダンス・ミュージックを生み出すべくひとり奮闘していた小室哲哉と、ロック・テイストのヒット・ソング工房のドンとして君臨していた長戸大幸率いるビーイングは作風こそ対照的であるが、時代をとらえるという点において向かっている方向は同じだった。ビーイングはB'zとZARDという2大スターだけでなく、“T-BOLAN”、大黒摩季、“DEEN”、FIELD OF VIEWなどが続々とヒットを飛ばすことになるが、その最前線に立ち続けていたのがロック・バンドのWANDSである。

WANDSは他のビーイング系グループと同様に、優秀なミュージシャンとヴォーカリストを組み合わせた精鋭部隊のようなバンドとして誕生した。1991年にデビューし、翌1992年に発表した3枚目のシングル「もっと強く抱きしめたなら」がCMタイアップ

の効果もあってミリオン・ヒットを記録。さらには同年に中山美穂と共演した「世界中の誰よりきっと」が累計200万枚を超える特大ヒット・ソングとなり、誰もが知る存在となるのだ。

本作はそういった状況を受けて発表したセカンド・アルバムである。彼らは何度かメンバー・チェンジを行っているが、この時点でのメンバーは、ヴォーカルの上杉昇、ギターの柴崎浩、キーボードの木村真也という3人。ただし、直前に脱退したキーボードの大島康祐が2曲楽曲提供している。作詞は基本的に上杉昇が手掛け、作曲にはメンバーの他に織田哲郎、多々納好夫、川島だりあといったビーイングの職人たちが参加。アレンジも明石昌夫と葉山たけしというビーイング・サウンドを支えた売れっ子アレンジャーによるものだ。

それだけに、楽曲のクオリティは非常に高く、しかもいずれもキャッチーでまるでヒット曲の教科書のように

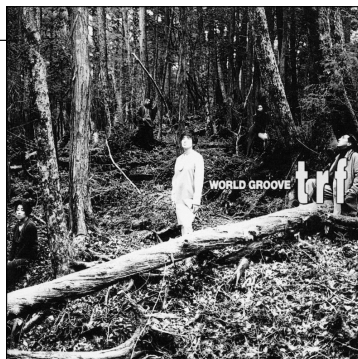
うでもある。基本的にはアメリカン・ロックやハード・ロックを基調にしているが、サビのメロディラインやヴォーカルの聴かせ方などは一貫してわかりやすい。先行シングルとして発表されたエッジーな表題曲「時の扉」、ジャーニーを思わせる雄大な「星のない空の下で」、ハードかつドラマティックなバラード「そのままの君へと…」、シンセ・サウンドがきらびやかな「孤独<S>TARGET」、ブルージーなテイストの「Keep My Rock'n Road」とバラエティ豊か。また、DEENへの提供曲をセルフ・カヴァーした「このまま君だけを奪い去りたい」や、「世界中の誰よりきっと」のWANDS単独ヴァージョンまで盛りだくさんだ。

ビーイング作品はどうしてもタイアップによる大ヒットのイメージが強いが、それだけ大衆に受け入れられるために、盤石で隙のない音作りが行われていた。その事実、本作を聴けば誰しも納得するはずだ。

WORLD GROOVE

1994年2月9日発売
avex trax

01. WORLD GROOVE 1st.chapter
(Forest Ambient)
02. feel the CENTURY
03. 寒い夜だから… (SEQ OVER DUB MIX)
04. CAMILLE CLAUDEL
05. WORLD GROOVE 2nd.chapter
06. Waiting Waves (夏の気分を待ちわびて)
07. Silver and Gold dance (Remix)
08. Beauty and Beast
09. 愛がもう少し欲しいよ
10. Winter Grooves
11. WORLD GROOVE 3rd.chapter
(main message)
12. 私が望むもの…あなたが欲しいもの
(Do what you want)



コアなダンス・ミュージックを実験的に取り入れた、
小室哲哉によるTKサウンドを象徴するアーティスト

小室哲哉が関わったTKサウンドは、90年代の象徴のひとつである。TM NETWORKのメンバー

として80年代を席卷した小室哲哉だが、90年代初頭にはavex traxとプロデューサー契約を結んだ。1990年に設立されたavex traxはユーロビートのコンピレーション・アルバムを多数リリースしていたレーベルだったが、数年後にJ・POPの市場への参入を画策。その初期のアーティストのひとつが、小室哲哉全面プロデュースによるE.T.だった。

E.T.のグループ名の由来は、小室哲哉が主宰するクラブイベント「TK RAVE FACTORY」であり、あくまでもイベントに出演するための流動的なユニットだったという。メンバーには、ダンスチームのZOOからYU-KI、同じくダンスチームMEGA-MIXからSAM、ETSU、CHIHARU、そしてThe JG'sとごうリミックス・チームで活躍していたDJ KOOが集められ、1993年にシングル「GOING 2 DANCE/OPEN YOUR MIND」

とアルバム『uh~THIS IS THE TRUTH~』でデビューを果たす。ダンサーとDJがいるユニットは当時画期的で、2作目のシングル「EZ DO DANCE」がCMタイアップで露出が増えたこともあり、ディスコやクラブ・シーンだけでなく一気に一般層での人気が高まった。

本作は勢い付いていた時期に発表された3作目のアルバムで、ミリオン・セールスを記録する大ヒットとなった。ヒットの要因はやはり先行シングルとなった「寒い夜だから…」の力が大きいだろう。一度聴いただけで覚えられるキャッチーなサビのフレーズは、小室哲哉が狙っていた、カラオケで歌えるダンス・ミュージック”をわかりやすく具現化した一曲でもある。他にもトランスを取り入れたクールながらもダンサブルな「Silver and Gold dance」や、ミディアム・テンポで大人っぽく落ち着いた雰囲気を出した「愛がもう少し欲しいよ」が既発シングルで、いずれもミック

ス違いをアルバムに収録している。

ただこういったシングル楽曲以外は、かなりコアなダンス・ミュージックを実験的に取り入れている印象が強い。トランシーなテクノの高揚感を絶妙に盛り込んだ「feel the CENTURY」、タイトなビートにアンニユイな空気感を取り入れた「CAMILLE CLAUDEL」、そしてH Jungle With「WOW WAR TONIGHT」時には起こせよムーヴメント(1995年)のプロトタイプとも言えそうなラガマフィン・レゲエ風の「Waiting Waves(夏の気分を待ちわびて)」など、とにかく世界中のシーンにアンテナを張り巡らせて得たダンス・ビートをTKサウンドのフィルターを通して再構築されているのだ。

Eの登場により、DJやダンサーがいるグループは増えていき、カラオケで歌えるダンス・ミュージックも何ら珍しくはなくなった。そうした意味においても、彼らが作り出した音楽は非常に画期的だったのである。

スピッツ

スピッツ

ハチミツ

1995年9月20日発売

Polydor

01. ハチミツ
02. 涙がキラリ☆
03. 歩き出せ、クローバー
04. ルナルナ
05. 愛のことば
06. トンガリ'95
07. あじさい通り
08. ロビンソン
09. Y
10. グラスホッパー
11. 君と暮らせたなら



スピッツの音楽にはこっそりと毒が盛られていたり、
小さなトゲが隠されていたりする

スピッツほど愚直で誠実なバンドはいない。シンブルなバンド・サウンドと、のびやかなヴォーカルの印象がそう思わせるのだから、実のところ、彼らの音楽にはこっそりと毒が盛られていたり、小さなトゲが隠されていたりする。それがまた、彼らの音楽がクセになってしまう理由だ。

1987年にヴォーカルとギターの草野マサムネ、ギターの三輪テツヤ、ベースの田村明浩、ドラムスの崎山龍男という4人で結成されたスピッツは、インディーズで活動した後、1991年にメジャー・デビューを果たす。『スピッツ』（1991年）や『名前をつけてやる』（1991年）などの初期作品は、日本のオルタナティブ・ロックに位置付けられ、クオリティも評価も高かったが、少しひねくれているように見えたのかセールスは苦戦を強いられた。笹路正徳をプロデューサーに迎えた『Crispy!』（1993年）あたりから少しずつ認知を広げ、『空の飛び方』（1994年）でようやく

チャートイン。「空も飛べるはず」や「青い車」などのシングルが売れ続け、ついに「ロビンソン」でミリオン・ヒットを生み出すのである。

その「ロビンソン」と続くヒット・ナンバー「涙がキラリ☆」を収めた6作目のオリジナル・アルバムが本作である。ここでも笹路正徳が共同プロデュースを行っているが、『Crispy』の頃のようなオーヴァー・プロデュース感はなく、あくまでもスピッツ4人のアンサンブルを引き立てるような淡い色付けがなされている。いわば、両者の志向性が見事に融合したといえるだろう。

本作はあくまでも、メロディアスな歌とシンプルなサウンドのロック・ナンバーが中心だ。冒頭のタイトル曲「ハチミツ」は非常に自然体だし、グルーヴィーなバンド・サウンドが味わえる「歩き出せ、クローバー」、さらに疾走感溢れるビートと陰影のあるメロディの「ルナルナ」、ミディアム・テンポで淡々と綴る「愛

のことは」と聴き進めると、バンド感はしっかりと出つつも、力み過ぎない心地良さと、ピリリとしたスパイスのような言葉の断片を見つけていることができるだろう。

中盤から少し変化球も増え、ハードでオルタナティヴな質感の「トンガリ'95」、歌謡性を感じさせる哀愁味に満ちた「あじさい通り」、美しいスロー・ソング「Y」、初期のパンク・テイストを感じさせる「グラスホッパー」と続き、「ロビンソン」に通じるポップな「君と暮らせたら」でアルバムを締める。

いずれも草野マサムネの天才的な創作力とシニカルで文学的な視点が組み込まれており、その世界観をシンプルなバンド・サウンドで形作るメンバーの力量も強力だ。一度ハマると抜けられない底なし沼のようなスピッツの魅力が、そこかしこに感じられる永遠の傑作である。

フィッシュマンズ

フィッシュマンズ

空中キャンプ

1996年2月1日発売

Polydor

01. ずっと前
02. BABY BLUE
03. SLOW DAYS
04. SUNNY BLUE
05. ナイトクルージング
06. 幸せ者
07. すばらしくて NICE CHOICE
08. 新しい人



本作が絶賛される理由は、何よりもこの時点で彼らの奇跡のようなクリエイティビティが記録されているからだ

レゲエをルーツとするアーティストは日本にも数多くいるが、フィッシュマンズほど独自の進化を遂げたバンドはいないのではないだろうか。1987年に結成し、1991年にメジャー・デビューした彼らは、当初はレゲエの他、スカやロックステディなどのエッセンスを感じさせるポップなロックという印象で、ヴォーカルの佐藤伸治、ドラムスの茂木欣一、ベースの柏原譲、ギターの小嶋謙介、キーボードのハカセという5人組だった。しかし、徐々に他のジャンルを取り入れながら進化していき、その過程で小嶋謙介とハカセが脱退。3人になって初のアルバムが、90年代ジャパニーズ・ロックの金字塔といわれる本作である。

このアルバムが絶賛される理由は、何よりもこの時点での彼らの奇跡のようなクリエイティビティが記録されているからだ。フィッシュマンズの代名詞だったレゲエというジャンルだけではくくり切れないし、

ダブ、ファンク、エレクトロニカ、テクノ、ヒップホップ、オルタナティブ・ロックなどありとあらゆる音楽のエッセンスが注入されている。

クールなオープンニングの「ずっと前」から一気にスパイシーな音空間に放り出されるような感覚になり、ラヴァーズ・ロックのような浮遊感を湛えた「BABY BLUE」の後は、荒っぽいギターの音色でロック色を強めに押し出した「SLOW DAYS」と、ハウス・ミュージックのような反復が渦巻く「SUNNY BLUE」に繋がり、先行シングルだった大名曲「ナイトクルージング」に行き着く。グルーヴィーでメロウ、そしてダビィなこの曲は、3人編成になってからのフィッシュマンズを象徴する一曲だ。エコーの深いエレクトリック・ギターにノイズ交じりのエフェクトがかけられ、佐藤伸治の歌声が夜空から降ってくるように現れる。短いセンテンスの歌詞ではあるが、真夜中に空中を舞うような感覚は、彼らにしか生み出せないサウンドの

極北である。

その後も、気怠さが心地良い「幸せ者」、キャッチーかつヘヴィで実験的な「すばるじゅっNICE CHOICE」へと続き、夢の中をまどろんでいるようなダブ・ナンバー「新しい人」でアルバムを締めくくる。そしてその夢心地の感覚が、そのままアルバムの印象として残るのだ。エンジニアのZAKとの共同作業も、本作を形作った大きな要因であることは間違いなく、録音芸術としても新たな地平にたどり着いたのである。

本作の後、同じく1996年のうちに1曲35分という想像を絶する作品『LONG SEASON』、翌1997年にはさらに深化したサウンドのアルバム『宇宙日本世田谷』を発表。誰も到達できない唯一無二のバンドへと成長したが、1999年3月に佐藤伸治が急逝し、90年代の終焉と共にフィッシュマンズも幕を下ろすのである。

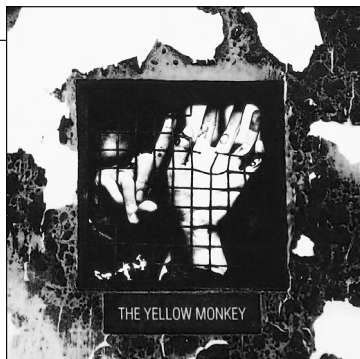
THE YELLOW MONKEY

ザ・イエロー・モンキー

SICKS

1997年1月22日発売
FUN HOUSE

01. RAINBOW MAN
02. I CAN BE SHIT, MAMA
03. 楽園
04. TVのシンガー
05. 紫の空
06. 薬局へ行こうよ
07. 天国旅行
08. 創生児
09. HOTEL宇宙船
10. 花吹雪
11. 淡い心だっと思ってたよ
12. 見てないようで見てる
13. 人生の終わり (FOR GRANDMOTHER)



電撃的なレコード会社移籍後に発表した
当時の日本語ロック・シーンの最重要作品

ビ

ート・パンク、ジャパニーズ・メタル、ヴィジュアル系など、日本のロックのトレンドは数多くあるが、そのいずれにも属していそうでもそうとも言い切れない不思議な立ち位置のロック・バンド。THE YELLOW MONKEYはそんなイメージがある。ヴォーカルの吉井和哉、ギターの菊地英昭、ベースの廣瀬洋一、ドラムスの菊地英二という4人が奏でる音楽は、とにかくジャンルレスのロックである。ハードロック、グラムロック、ヘヴィメタル、パンクなどから、ブリット・ポップやディスコ、歌謡曲までとにかく幅広い。しかし、それでもまったくブレがないように感じるのは、吉井和哉という天才的な表現者が中心にいるからだろう。

1992年にメジャー・デビューした彼らは、当初それほど注目されたわけではなかった。しかし、徐々にライヴの動員も増え、『Jaguar hard pain』（1994年）のようなセンセーショナルな作品を発表している

うちに人気も高まっていった。そして、1996年には「JAM」と「SPARK」という対照的な名曲をヒットさせて、トップ・バンドに躍り出たのである。

そんな絶頂を迎えようとしている矢先、電撃的なレコード会社の移籍を敢行して発表したのが6作目のアルバムとなった本作である。先行シングル「楽園」も大ヒットしているが、まさに新天地に向かうという意味の歌詞が様々な憶測を呼んだ。そして、この曲のヌケの良さは、あらためて音楽シーンに彼らの存在感をアピールすることとなり、アルバムは当時の日本語ロック・シーンの最重要作としてメディアからも高く評価されることになった。

それにしても、ロックという骨格を守りながら、ここまで引き出しの多さを見せるバンドはなかなかないだろう。少しサイケなオールド・ロック風の「RAIN BOW MAN」に始まり、テレビの歌番組に出演するバンドを自虐も込めて歌った「TVのシンガー」、デヴ

イッド・ボウイを思わせるロックンロール「創生児」、ポップな歌謡ロック風の「HOTEL宇宙船」、和のテイストを感じさせる「花吹雪」など、振り幅の広い多重人格的なパフォーマンスに魅了される。さらにライヴで培ったアンサンブルとヴォーカルのマッチングには、風格すら感じさせられるだろう。

そして、ここには無視できないシリアスなナンバーが2曲ある。ひとつは8分を超えるプログレッシヴでドラマティックな「天国旅行」。そして、血が泣いてるんだよ」というフレーズが耳にこびりつく、祖母に捧げたという「人生の終わり」(FOR GRANDMOTHER)。こういったヘヴィなナンバーがしっかりと含まれたことで、単なるポップ・ロックのバンドにはない重みと深みを作り上げたのだ。そして活動休止となる2001年の東京ドーム公演までは、孤高のロック・バンドとして独自の道を突き進んでいくのである。

モーニング娘。

モーニングムスメ

ファーストタイム

1998年7月8日発売
zetima

01. Good Morning
02. サマーナイトタウン
03. どうにかして土曜日
04. モーニングコーヒー
05. 夢の中
06. 愛の種
07. ワガママ
08. 未来の扉
09. ウツつきあんた
10. さみしい日



モーニング娘。はあくまでもパフォーマーとしての
実力を前提にしたエリート集団でもあった

大人数で歌って踊るアイドル・グループなんて今でこそ珍しくもないが、現在の主流を作った先駆者と言えは間違いなくモーニング娘。だ。もちろん、80年代にはおニャン子クラブという存在はあったが、おニャン子が可愛さやキャラクター先行の典型的なアイドルだとしたら、モーニング娘。はあくまでもパフォーマーとしての実力を前提にしたエリート集団でもあった。

1997年に始まったテレビ東京系のバラエティ番組『ASAYAN』で行われたオーディション企画は、当初こそシャ乱Qが主催する女性ロック・ヴォーカリストの選考がメインだったが、ここで見出された5名、福田明日香、中澤裕子、飯田圭織、石黒彩、安倍なつみがグループを結成する流れとなって生まれた。彼女たちは最初にインディーズでシングル「愛の種」をリリースし、5日間で5万枚売り切るという課題を与えられ、無事にクリアして翌1998年に正式にデビュー

ーを果たすのである。こういった彼女たちの歌唱力をしっかりと堪能できるのが、ファースト・アルバムとなった本作である。ここには前述の5名に加え、第二期のオーディションで合格した保田圭、矢口真里、市井紗耶香という3名が合流し8名のグループとして制作が行われている。

アルバムのトータル・プロデューサーはシャ乱Qのつんくで、ほぼ全曲の作詞作曲を手掛けている。アーティストとしては売れっ子だったが、プロデューサーとしてはまだ駆け出しといってもいい時期だ。しかし、ここで聴けるのは本気モードのつんくによるサウンド・プロダクション。そして、それに見事に応えた8名のメンバーのドキュメントが刻まれている。COSA NO STRAの桜井鉄太郎をアレンジャーに迎えたオールディーズ風のメジャー・デビュー・シングル「モーニンググコービー」で、すでに個々の歌い手としての魅力を引き出している。さらにセカンド・シングルとなった

「サマーナイトタウン」は、大胆でダンスアップルなビートを取り入れ、ラップ風の掛け合いから一気にマイナー調のサビへと展開していく。おそらくTLCやSWVといった米国のR & Bのトレンドを少なからず意識していたのだろうが、それとは距離を保ったままドメスティックな魅力をふんだんに取り入れ、ダンス歌謡として完成度の高い楽曲を作り上げた。

ただ、この時点ではまだ楽曲の方向性に試行錯誤が感じられる。グループヴィーで渋谷系の流れを感じるメロディアスな「Good Morning」、70年代ディスコへのオマージュのような「どうにかして土曜日」、ヒップホップを取り入れた「未来の扉」、そして切ないバラードの名曲「さみしい日」までありとあらゆるタイプの楽曲が並ぶ。歌い手としてはなかなかハードルが高いはずだが、つんくのプロデューサー力によって見事な作品に昇華したのである。

RHYMESTER

ライムスター

リスペクト

1999年7月20日発売

NEXT LEVEL RECORDINGS

01. R.E.S.P.E.C.T
02. キング・オブ・ステージ
03. 「B」の定義 featuring CRAZY-A
04. B-BOYイズム
05. 麦の海
06. Hey, DJ JIN
07. マイクの刺客 - DJ JIN 劇画 REMIX -
08. 野性の証明
09. ブラザーズ
featuring KOHEI from MELLOW YELLOW
10. ビッグ・ウェンズデー
featuring MAKI THE MAGIC
11. 隣の芝生にホール・イン・ワン
featuring BOY-KEN
12. 敗者復活戦
13. 耳ヲ貸スベキ
14. リスペクト
featuring RAPPAGARIYA



インディーズ時代の代表作とされる本作は、
自身が辿ってきた90年代にとどめを刺す金字塔

渡

谷系からR&Bディーヴァ・ブームへと、移行
変わる時代のサブカルチャーとつかず離れずシ
ーンを盛り上げてきた日本のヒップホップ。1996
年に行われた野外フェス「さんピンCAMP」がひとつ
のピークだとしたら、90年代末はメインストリームへ
向かう発展期といえるだろう。RHYMESTERのインデ
ィーズ時代の代表作とされる本作は、そんな90年代に
とどめを刺す金字塔といつていいかもしれない。

RHYMESTER自体は、歴史のあるヒップホップ・グ
ループである。多数のラッパーたちを輩出したことで
知られる早稲田大学のサークル「ソウルミュージック
研究会ギャラクシー」に在籍していた歌丸(後の宇多丸
が、新入生として入部してきたMummy-Dと1989
年に組んだのがRHYMESTERの始まりだ。後に同じサ
ークルに入ったDJ JINが途中加入して現メンバーとな
り、2MC&1DJスタイルのグループとして活動す
る。1993年にはアルバム『俺に言わせりゃ』を発

表。MELLOW YELLOWやEAST ENDとともに「FUN KY GRAMMAR UNIT」というヒップホップ・コミュニティを結成し、ヒップホップの発展に貢献した。

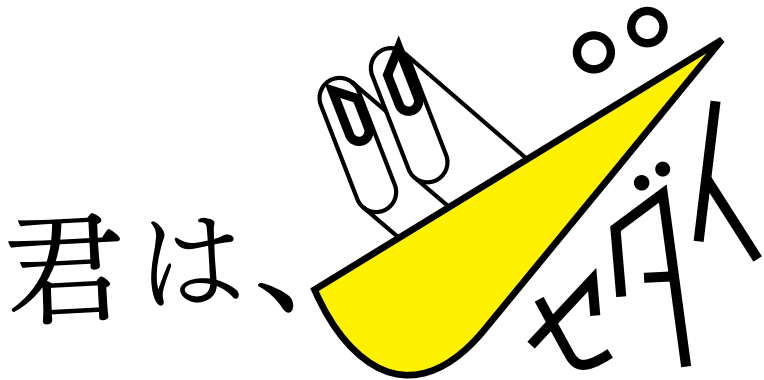
まるでベスト・アルバムのように代表曲が収められている1999年発表の本作だが、その中から敢えて一曲選ぶならなんといっても「B-BOYイズム」だろう。ジミー・キャスター・バンチをサンプリングした軽快なホーンのリフが高らかに鳴り響き、野太いグルーヴのバックトラックへとなだれ込んでいく。ライムはBOYであることを高らかに宣言し、ヒップホップ・シーンの隆盛を予感させるような内容に仕上がっている。韻を踏んだキャッチーなサビと、気骨に満ちたソロ・パートとの対比も見事だ。

自分たちを誇示するようなアティテュードはヒップホップの定番だが、ここでも「キング・オブ・ステージ」や「マイクの刺客 - DJ ZIN 劇画REMIX -」、「ビッグ・ウェンズデー」などにも表れており、当時のシ

ーンにおけるRHYMESTERの鼻息の荒さがひしひしと伝わってくる。この鋭角的な姿勢はアルバム全体に一貫しており、社会批評的なメッセージが込められた「野性の証明」や「敗者復活戦」などにも感じられ、20世紀末の不穏で落ち着かない世相を見事に切り取った「耳貸スベキ」の冷ややかな感覚も印象的だ。

ただ、こういった強烈なメッセージをクールでグルーヴィーに包みこんだバックトラックも特筆しておきたい。ファンクやジャズといったいわゆるレアグルーヴ感覚を基調にした彼らのサウンドは、程よく攻撃性を中和するだけでなく、アンダーグラウンドにとどまらないという意思にも感じられる。乱暴にいうと、オシャレですらあるのだ。

RHYMESTERは2001年にメジャー・デビューを果たし、狭いコミュニティに閉じこもらない活躍ぶりを見せている。本作は、その活動の原点ともいえる傑作である。



君は、ゼダイ人 何と闘うか？ <https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、**行動機会提案サイト**です。読む→考える→行動する。このサイクルを、困難な時代にあっても前向きに自分の人生を切り開いていこうとする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!